イエスのことば　第 38 回

するとイエスは言われた。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」

（マルコ 7：27 ）

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、**退避（リトリート）と休息の時**であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。

3. 異邦人地域へのリトリート第 1 回：ガリラヤ地方を離れて、ガリラヤ湖の北東地域の町ベツサイダの近くへ。「五千人の給食」と呼ばれる奇跡を通しての訓練
4. 「五千人の給食」の奇跡の直後、嵐の中での訓練
   (1) 給食を受けた群衆（ガリラヤ地方のユダヤ人たち）がイエスを王に擁立しようとするが、イエスはその動きを拒み、弟子たちだけを舟に乗せて出発させた（日没直前）。
   (2) 弟子たちの舟は、日没後から夜明け前まで、湖上で嵐に見舞われる。イエスは湖上を歩いて舟に乗る。弟子たちはイエスの神性を認めた。
5. 舟は、ガリラヤ湖の北西岸、ユダヤ人の地域に到着。そして宣教拠点のカペナウムに戻ってきたときに、給食を受けた群衆が追いかけてきたので、「いのちのパン」の教え。
6. 前回は、引き続き、カペナウムでの出来事。監視団が、「汚れを洗いきよめる」ことに関するミシュナ（言い伝え）に照らして、イエスは違反している、と非難した。これに対してイエスは、神がミシュナをどのように見ておられるのか、そして、人を汚すものは食べ物ではなく、人の内側にある罪の性質であると教えられた。

7. 今回は、異邦人地域へのリトリート第 2 回。行先は、ツロとシドンの地方。ツロでは、異邦人の女性がイエスへの信仰を表明し、幼い娘から悪霊を追い出していただいた。

リトリート第２回・ツロにて

□地中海岸の町ツロへ。ある異邦人女性がついて来て、道を歩きながら、叫び続けた

（マタイ 15：21～24）
イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に退かれた。
すると見よ。その地方のカナン人の女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けた。
しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。
弟子たちはみもとに来て、イエスに願った。「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」
イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

1. ここでは、異邦人女性が、イエスに「ダビデの子よ」と呼びかけている。「ダビデの子」とはメシアの呼称であり、イスラエルの王を意味する。この呼びかけには、二つの誤りがある。
   (1) 第一は、イスラエルの指導者層は、すでにイエスをメシアではないと公式拒否していた。もはやメシアの王国は将来の世代に先送りされて、奥義としての神の国の時代に入っている。イエスが王として立つ時ではない。
   (2) 第二に、異邦人が、ユダヤ人にとって代わって、イエスを王とすることはできない。異邦人がイエスを「ダビデの子よ」と呼んでも、イエスは答えることはできない。メシアは、イスラエルから出て、イスラエルのために遣わされていた。

2. 異邦人がイエスに近づく道は・・・
   (1) 「ダビデの子よ」と呼びかけるのではなく、
      - 創造主なる神、全人類の神から遣わされたイエスに向かって
      - ひとりの人間として、自分の個人的必要を訴えて近づく
   (2) その意味で、この女性が、「私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けるのは、必要なプロセスであった。
   (3) だから、イエスは弟子たちが意見しても、女性を去らせることをしなかった。

□イエスは家に入ると、女がみもとに来ることを許した

（マタイ 15：25）
しかし彼女は来て、イエスの前にひれ伏して言った。「主よ、私をお助けください。」
（マルコ 7：24～26）
イエスは立ち上がり、そこからツロの地方へ行かれた。家に入って、だれにも知られたくないと思っておられたが、隠れていることはできなかった。
ある女の人が、すぐにイエスのことを聞き、やって来てその足もとにひれ伏した。彼女の幼い娘は、汚れた霊につかれていた。
彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであったが、自分の娘から悪霊を追い出してくださるようイエスに願った。

□イエスのことばと女の応答

（マルコ 7：27～28）
するとイエスは言われた。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」
彼女は答えた。「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンくずはいただきます。」

□イエスは女の信仰を確認して、娘から悪霊を出て行かせた

（マルコ 7：29～30）
そこでイエスは言われた。「そこまで言うのなら、家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」
彼女が家に帰ると、その子は床の上に伏していたが、悪霊はすでに出ていた。
（マタイ 15：28）
そのとき、イエスは彼女に答えられた。「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように。」彼女の娘は、すぐに癒された。

■この女性の信仰が「立派」だと評価された理由は？　マルコ 7：28
参照　ロマ 11：17～24　【アブラハム契約・イスラエル・異邦人】の関係
① オリーブの根（17 節）
② 本来栽培された枝（24 節）
③ 本来野生であるオリーブから切り取られ、元の性質に反して、栽培されたオリーブに接ぎ木された枝（24 節）